

お正月の餅をつかない 桑崎、鵜無ヶ淵部落

昭和五十四年一月一日号



餅をつくと火にたたる

昔から桑崎部落と鵜無ヶ淵部落は「餅をつくと火にたたる」という伝説があつて、正月の餅をつきません。でも中には、子どもた

ちがかわいそつだといつて、他村の親類から持ってきてくれたり、ウルチの餅をつくったり、あるいは「とじもち」といって、家の奥の方でないしよに餅をついた家もありました。正月のお餅をおおつぴらではつかないという習慣は、今でもつづいています。しかし近ごろでは、隣近所にわからないように機械でつけるようになったので、たいていの家で、いい伝えにこだわらないで餅をついているようです。

なぜ、正月の餅に限つてつかないのか、それはいつごろからなのか明らかではありませんが、部落の古老の話をまとめてみますと

「むかし、不作がつづいて大飢饉(だいききん)に襲われ、そして村人が飢え死にするような事態になった。そのとき、この村の領主旗本戸田氏の中里村の陣屋から役人が調査にやってきました。村人は調査の役人に貧困の実情を訴えるために正月用の餅をつかなかつた。

いやほんとうに餅などつけるような生活ではなかつたであろう」といつています。

あるいは、これが餅をつかなくなつたほんとうの原因かも知れません。

むかし、鵜無ヶ洲村で、いい伝えを破つて、年の暮に餅をついた家がありました。ところがその晩に氏神の社殿が丸焼けになつたので、村人は「火にたつた」といつて、その後は禁をきびしく守るようになりました。昭和二十五年三月十一日の晩、湾の西風にあおられ

て、桑崎部落五十二戸のうち二十戸が全焼するといふ大火がありました。その原因はいろいろなうわさがとんで、真相は明らかではありませんでした。だれ言うとなく「暮れに正月用の餅をついた家があつたからだ」といふうわさをしました。

正月用の餅をつかないという習慣は、村の人たちが、火事を極端に恐れたということも、一つの原因だつたと思われれます。つまり鵜無ヶ洲村にしても、桑崎村にしても、昔は井戸のない、水に不便な村でしたから、とくに火について異常な恐怖心と警戒心があつたからで、その上に極めて切つめた生活をするということからだつたでしょう。